様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ２０７８７

研究課題名（和文）統合失調症者の家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Support Program for Enhancing Family Resilience of People with Schizophrenia

研究代表者
川口　めぐみ（Kawaguchi, Megumi）

福井大学・学術研究院医学系部門・講師

研究者番号：４０５５４５５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、家族レジリエンスの実態把握のため、地域住民125名を対象にアンケート調査を実施した。その結果、故人の支えを家族間で共有していること、うつを予防することが家族レジリエンスを高める可能性を示した。次に、統合失調症をもつ人の家族（親、配偶者、きょうだい）を対象にインタビュー調査を実施し、家族の経験を明らかにした。家族の中でも親14名の結果から、親は長期間、子を病気と理解できず対処の仕方に苦しむが、知識の獲得や物事の捉え方の改善により力を獲得することを報告した。
これらの結果を元に、看護支援プログラム（案）を作成し、精神疾患をもつ当事者から助言を受け修正し、プログラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国では、精神疾患をもつ人が住み慣れた地域で暮らすために、必要なサービスを導入し、その人を支援する地域包括ケアシステムの構築が急務となっている。精神疾患の中でも特に統合失調症をもつ人は症状に社会生活能力の低下がみられることや好発年齢が思春期から青年期であることから、家族の長期的な支援が必要となっている。
そのため、統合失調症をもつ人の発症早期からの介入を目指した家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムを開発することで、統合失調症をもつ人が地域での生活を継続していくための本人と家族への効果的な支援を見出すことにつながる。そして、将来的には地域包括ケアシステムの構築に寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we first conducted a questionnaire survey of 125 community residents to understand the actual status of family resilience. The results showed that sharing the support of the deceased among family members and preventing depression could increase family resilience. Next, we conducted an interview survey of family members (parents, spouses, and siblings) of people with schizophrenia to identify their experiences. Based on the results of 14 parents among the family members, we reported that parents struggle for a long period of time to understand their children as sick and to cope with the disease, but they gain strength by acquiring knowledge and improving the way they perceive things.
Based on these findings, we developed a nursing support program, modified it advice from parties with mental illness, and developed the program.

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症をもつ人　家族レジリエンス　看護支援プログラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、わが国では、統合失調症をもつ人を地域包括ケアシステムにおいて支える体制の構築が急務となっている。しかし、統合失調症をもつ人の地域での生活は、多くの場合その親に支えられている現状が報告されており（全国精神保健福祉会連合会，2018)、統合失調症をもつ人と家族との接触時間の増加は、家族の統合失調症をもつ人に対する「敵意」「批判的」「情緒的巻きこまれすぎ」の感情を生み（伊藤ら、1992)、これらの感情表出は統合失調症をもつ人のストレス因となり再発率を高めるとの報告がある（大島ら、1994)。

これらのことから、統合失調症をもつ人が地域での生活を継続するためには、統合失調症をもつ人とその人の地域での生活を支えている家族が家族成員の統合失調症発症に伴う困難に対して、家族の機能を変化させ対処する力、すなわち「家族レジリエンス」を高めることが重要になるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究では、我が国では初めての統合失調症をもつ人の「家族レジリエンス」を高めるための早期介入継続看護支援プログラムの開発を目指している。そのために、以下の 3 点を明らかにすることを目的とした。

(1)　家族レジリエンスと家族レジリエンスに影響する要因を含めた家族レジリエンスの実態を明らかにする。

(2)　家族が統合失調症の発症によって揺らいだ家族機能を現在までにどのように変化させ、どのように対処する力を獲得してきたのか、家族機能が変化する出来事を明らかにする。

(3)　これまでの研究結果から、統合失調症をもつ人の家族レジリエンスを高めるための看護支援内容を検討し、家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムを作成する。このプログラムを統合失調症をもつ人および家族に提示し、助言をもとに修正を加え、統合失調症をもつ人の発症早期から本人と家族を対象に継続的に実施する家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムを開発する。

３．研究の方法

(1)　地域高齢住民 125 名を対象として、大山らの家族レジリエンス尺度（大山ら、2013）を用いたアンケート調査を実施し、家族レジリエンスの実態および関連する要因を明らかにした。

(2)　統合失調症をもつ人の家族（親 16 名、配偶者 1 名、きょうだい 8 名）を対象に、インタビュー調査を実施し、家族成員の統合失調症発症から地域での生活を継続するまでの家族の経験を明らかにした。

(3)　アンケート調査およびインタビュー調査の結果を元に、統合失調症をもつ人の家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラム（案）を作成し、精神疾患をもつ当事者に提示し、内容への助言をもらいプログラム内容を修正し、看護支援プログラムを開発した。

４．研究成果

(1)　家族レジリエンスの実態および関連する要因を検討したアンケート調査の結果、家族レジリエンス尺度下位 5 因子である「結びつき」、「家族の力への信頼」、「個と関係のバランス」、「スピリチュアリティ」、「社会的経済的資源」の、「スピリチュアリティ」において、配偶者同居群（91 名）よりも配偶者死別群（34 名）の得点が有意に高かった。またうつ傾向群（50 名）よりも非うつ傾向群（75 名）の得点が有意に高かった。「スピリチュアリティ」のうち、特に「心の支えとなる故人の存在感の共有」に関する得点が死別群で高く、死別群 34 名中 33 名が、「あてはまる」あるいは「よくあてはまる」と回答した。配偶者との死別体験を通じて得たスピリチュアリティ、特に故人の支えを家族間で共有していると感じること、さらにうつ傾向を予防することが、家族での困難な出来事からの回復力を高めることが考えられた。地域高齢住民の家族レジリエンスの実態は、十分に明らかにされておらず、新たな知見を得ることができた。これらの内容は、福井大学医学部研究雑誌第 18 巻にて発表した。

(2)　統合失調症をもつ人の家族を対象としたインタビュー調査の結果、まずは、統合失調症をもつ人の地域生活を支えている親に焦点を当て、経験を明らかにした。その結果、親は子の発症早期から長期にわたり子を病気と理解できず対処の仕方に苦しみ続けるが、知識の獲得や物事の捉え方の改善により、子とのつき合い方を見出し、自身の生活を充実させる力を獲得することを明らかにした。この結果は、Journal of Wellness and Health Care 第 41 巻 2 号で発表した。

また次に、親の亡き後の子どもの将来の生活のための準備の行動を木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、18 概念を生成し、コアカテゴリー≪救い

を求めたい人に病気を打ち明ける≫と 3 つのカテゴリー≪他者の助けを必要とする疾患との共生の受け入れ≫≪生活維持のための調整≫≪個々の人生を尊重する≫が導き出された。コアカテゴリー内の概念である＜ピアとの交流をもつ＞ことは、特に親の行動変化に影響していた。統合失調症をもつ人とその親への看護支援として、看護師が親の準備行動プロセスの段階を把握すること、常に揺れ動く親の思いに寄り添い、支援の方向性を柔軟に変化させること、統合失調症をもつ人のきょうだいへの支援を提供することが重要であることが明らかとなった。これらの結果は、精神障害とリハビリテーション誌第 25 巻第 1 号において発表した。

統合失調症をもつ人の家族を対象とした研究の多くは、家族の苦悩や負担軽減を目的とした支援の検討が行われている。本研究において、統合失調症をもつ人とその家族の苦悩や負担の軽減に加え本人と家族のもつ力に着目してその力を高めるための支援を検討できたことは非常に重要である。

(3) 統合失調症をもつ人の家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの開発過程において、精神疾患をもつ当事者の助言を受けてプログラム内容の修正を行った。わが国では、世界最先端の医療技術・サービスを実現し、健康寿命世界一を達成すること目的として健康・医戦略推進本部が内閣官房に設置されている。2017 年、その組織が作成した「医療分野研究開発推進計画」において、研究の立案段階から被検者や患者の参画を促進することの必要性が示されているが（健康・医療戦略推進本部，2017)、当事者は研究の対象者であるという認識がいまだ根強い。このような背景の中で、プログラム開発の過程において精神疾患をもつ当事者の参画を実現できたことは非常に意味ある結果である。当事者の助言を受けてプログラム内容を修正した過程の詳細な内容は、現在執筆段階であり、今後学術誌にて発表予定である。

＜引用文献＞

①伊藤　順一郎，大島　巌，坂野　純子，他．EE(expressed emotion)と再発，脳と精神の医学，3（2)：163-173，1992.
②大島　巌，伊藤　順一郎，柳橋　雅彦，他．精神分裂病者を支える家族の生活機能と EE（expressed emotion)の関連，精神神経学雑誌，96（7)：493-512，1994.
③全国精神福祉会連合会．精神障がい者の自立した地域生活の推進と家族が安心して生活できるための効果的な家族支援等のあり方に関する全国調査．2018.
④大山寧寧，野末武義．家族レジリエンス測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討，家族心理学研究，27：57－70，2013.
⑤健康・医療戦略推進本部．医療分野研究開発推進計画，（平成 26 年 7 月 22 日健康・医療戦略推進本部決定）（平成 29 年 2 月 17 日一部変更）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Megumi Kawaguchi, Kazuyo Kitaoka	４．巻 41
２．論文標題 Research on the process by which parents of children with schizophrenia associate with their experience：From onset to continuing life in community	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Journal of Wellness and Health Care	６．最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川口めぐみ　東間正人　田中悠二　水上喜美子	４．巻 18
２．論文標題 地域で生活する高齢者の家族レジリエンス	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福井大学医学部研究雑誌	６．最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川口めぐみ　北岡和代　川村みどり　中本明世　森岡広美　片山美穂	４．巻 25
２．論文標題 統合失調症をもつ人の高齢期にある親の行動 ～親亡き後の子の将来のための準備のプロセス～	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神障害とリハビリテーション	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 川口めぐみ、平井孝治
２．発表標題 統合失調症をもつ人のきょうだいに関する国内文献の検討
３．学会等名 日本看護研究学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Megumi Kawaguchi, Hiromi Morioka, Akiyo Nakamoto,Midori Kawamura, Miho Katayama
２．発表標題 Parents Action of Person with Schizophrenia:preparing for the Future of Children after Parents Pass Away
３．学会等名 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 川口めぐみ
２．発表標題 地域で生活する高齢者の家族レジリエンス
３．学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Megumi Kawaguchi, Miho Katayama, Midori Kawamura, Akiyo Nakamoto, Hiromi Morioka
２．発表標題 Parents’ Action of Offspring with Schizophrenia: The Process of Preparing for the Future of Sons or Daughters after Parents’ demise
３．学会等名 Transcultural Nursing Society Conference 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 監修：森岡広美　阿部幸恵　片山知美　古谷昭雄　分担執筆：川口めぐみ	４．発行年 2021年
２．出版社 株式会社　金芳堂	５．総ページ数 232
３．書名 人生を自分らしく生き抜くための意思決定～ACP・QOL・QOD・人生デザインシミュレーション～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関